

外国人にとっての和室

— 畳の実用性と持続性 —

主査 鈴木 あるの*¹

委員 亀井 靖子*², 桐浴 邦夫*³, 松村 秀一*⁴

和室がヨーロッパにおいてどのように理解され普及しているのかを現地調査したところ、自然素材で作られていることが求められていることがわかった。そこでたとえば畳の場合、日本で普及している新建材の畳を知らないだけなのか、どのような考え商品を選ぼうとしているのかを探るべく、外国人約 463 名と日本人 269 名を含む約 750 名にアンケート調査したところ、自然素材であることに拘る外国人が日本人に比べて多いことが確認された。また海外での聞き取り調査から、畳や障子を内装に使う理由は、日本趣味というよりはむしろ、健康や環境配慮そして空間の有効利用といった実用的な動機が多く、昨今のヨーロッパの住宅事情に起因していることが判明した。

キーワード：1) 機能性, 2) イグサ, 3) 藁床, 4) 障子, 5) 和紙,
6) フトン, 7) 自然素材, 8) 狭小住宅, 9) 欧州市場, 10) 異文化理解

JAPANESE ROOM FOR NON-JAPANESE

- Practicality and Sustainability of Tatami -

Ch. Arno Suzuki

Mem. Yasuko Kamei, Kunio Kirisako, Shuichi Matsumura

In the European market, tatami mats are made of real *igusa* and rice straw, and they would not buy new synthetic materials, which are mainstream in Japan. European customers are looking for natural materials for health and sustainability. They are also looking for tatami beds and shoji sliding doors for space-saving purposes because houses and flats in big cities are getting smaller and smaller. A quantitative survey with about 750 respondents, including 269 Japanese and 463 non-Japanese people, proves that what we heard from Japanese-style interior vendors and users in Barcelona, Spain, and other cities generally applies.

1. 研究の目的

1.1 問題の背景

日本の住宅における和室の減少を受け、畳や障子といった建材や建具の製作者や取扱業者が激減している。畳においては化学床がほぼ主流となり、藁草の畳表の9割が中国産である。本物の和紙を用いた障子は歴史的建造物にしか見られない。そのためこれらの和風建材の材料の生産者も激減している^{文1)}。伝統的に最上級品とされていた備後表に至っては絶滅が危惧される中、継承会の有志による生産継続への努力が続けられている^{文2)}。

昨今では洋室の中の畳コーナーとして若干復活はしているが、それらの大半は和紙表や化成表を用いた薄い置き畳である。これらの新建材と天然イグサとの違いに頓着しない設計者も多く、藁床に至ってはその存在を知らない建築の専門家もいる。日本人にアンケートをすれば6割以上が「畳が好きだ」と答えるが^{文1)}、実際には新築物件からもリフォーム事例からも和室は消えている。

一方で海外の富裕層からは日本産の畳表が求められ問い合わせがあると聞く^{注1)}。しかしこのまま生産者が減っていけば、いずれ日本産の畳や和室用の建具、そしてそのための材料も消滅する。現在国産畳表のほぼ100%を担っている熊本でも、藁草農家は高齢化しており後継者が必要である。日本の畳表市場の8割近くを担っている中国産の藁草も、経済成長の中、いつまでも供給が長く保証はない。藁草の栽培は他の作物よりも手間がかかり、労力に利益が見合わないからである(図1-1)。



図 1-1 左：泥染め(広島県福山市) 右：藁草田(熊本県八代市)

*¹ 京都橘大学 教授 *² 日本大学 准教授 *³ 京都建築専門学校 副校長 *⁴ 早稲田大学大学院 教授

1.2 明治維新前後の欧米人の反応

明治初期に来日した動物学者の E. S. モースが「畳は寝台と椅子と長椅子と机の役割を兼ねる」と著したように、欧米人は畳の機能性を正しく理解している^{文3)}。彼らは家具が無く清潔で整った座敷を羨望する一方で、自分たちの身体づくりではこのような生活はできないこと、また窮屈な洋服のズボンを履いては床坐ができないことを嘆いた。靴を脱いで上がるからこそその清潔さと理解はしているが、自分達が靴を脱ぐことにはどうしても抵抗があった。また手放しの親日家モース博士ですら正座は苦手としていた^{文5)}。足首の関節のつくりの違いにより、慣れ不慣れに拘らず欧米人には物理的に正座が難しいという説もある^{文6)}。その他、江戸時代から明治にかけて渡日した欧米人には医師や博物学者といった自然科学系の学者や技師も多く、彼らの著書の中には住宅に関する細かい観察や客観的な分析を読むことができる^{文7)}。

1.3 2020年の予備アンケートから

日本経験のある外国人を対象に実施した予備アンケート調査によれば、439件の有効回答のうち、7割以上が畳を好きだと答えた。理由を複数選ばせたところ、触感(277)、匂い(198)、自然素材(147)、空間利用の自由度(144)が上位を占め、天然素材の畳の特性が好まれていた(図1-2)。懸念材料としては、維持管理(146)、衛生(99)、価格(76)等が挙げられた(図1-3)^{文3)}。

また自由記述の中では「お金が無いので家具の要らない和室にしたが、友達と気楽に集まれて楽しかった」という留学生もいた^{文3)}。過去の研究の中で、下宿先に和室を求めたり、家具を処分してまで和室的な空間をつくりたりする留学生もいたことから、都市生活者の狭い空間の中で、家具が不要で自由度の高い和室は、その利便性や経済性から選ばれているのではないかと考えた^{文4)}。

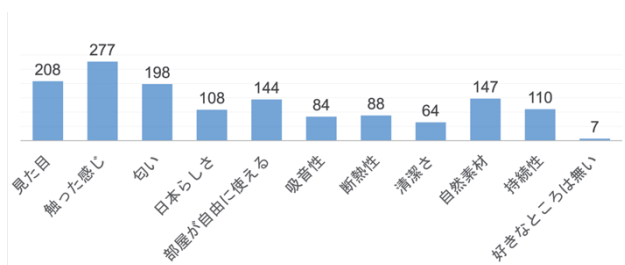


図1-2 外国人が畳を好きな理由(2020年のアンケートから)

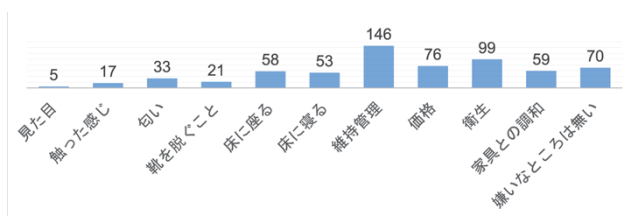


図1-3 外国人が畳を嫌いな理由(2020年のアンケートから)

2. 海外調査

2.1 バルセロナの和食店

事前の情報収集を通じて調査協力が得られたことから、2022年9月、スペインのバルセロナで視察と聞き取り調査を実施した^{注3)}。バルセロナは生魚を含む和食向きの食材調達が容易な立地であることから、和食店を名乗る飲食店の多い土地柄である。今回は和風の内装があることが予め確認できた和食店を5軒訪問した。それらの店舗では、創業者、経営者または施工者のいずれかが日本人であった。特に日本人職人が施工した店舗は、まさに日本国内の飲食店そのものであった(図2-1)。

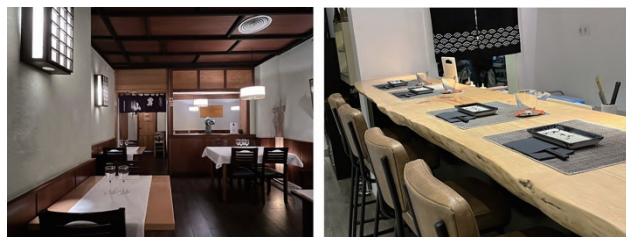


図2-1 日本人が施工した和食レストラン

バルセロナでも特に古い和食店である1970年代開業のYamadoriと、1990年代開業のYashimaの造作は、いずれも日本から大工を帯同して施工したとのことで、今では日本でもなかなか見られないような本格的な日本建築である。和室の造作に欠かせないスギ材は日本以外では手に入らないはずなので、おそらく別の針葉樹材^{注8)}でよく似た雰囲気を出していた(図2-2)。

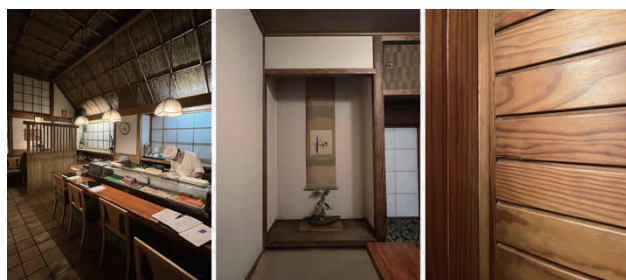


図2-2 1970年代創業の和食店の内装

これらの造作は手入れも行き届き非常に良い状態であったが、唯一の悩みは畳の表替えができないことである。表替え用のゴザは日本から持参しているのだが、張り替えのできる職人がいない。しかたなく、茶会の時以外はカーペットで覆っている(図2-3)。このような現状を受け、畳の輸出を多く手がけている日本の畳店が、素人でも表替えのできる「畳メイキングキット」を開発した。海外の大統領公邸などに施工実績がある。この方法は糸で縫うのではなくタッカー留めを使うので、素人でも施工できるし、現地の椅子の革張り替え職人に頼むこともできるとのことである^{注4)}。



図 2-3 1990 年代創業の和食店の内装

和食店においても住宅においても、現地の職人の手による造作においては、納まりや施工の問題が目についた。特に紙の障子にはシワが目立っていた。バルセロナには日本人の職人もいるので、彼らに依頼するか、あるいは正しい施工方法を教わればよいと思うのだが、施主に渡された日本の写真をもとに見よう見まねで作っている。中には、トイレの入口など人通りの多い場所に紙の障子を使ったものの、破れや汚れに悩まされ、一部ポリカーボネート板に取り替えている飲食店もあった（図 2-4）。



図 2-4 施工や維持管理上の問題点

2.2 和風インテリア販売店

ヨーロッパで和風インテリア取扱店は「フトン店」で見つけられることが多い。フトンを置くための台として畳ベッドがあり、それに合わせて障子のような扉やスクリーン、コーディネートできる木製家具が販売されている。大手では、イタリアの家具メーカーCinius がそれらの家具を製造しヨーロッパ一円に販売している（図 2-5）。

バルセロナでは Cinius の独占販売権をもつ Futon Llit で店主の Riera 氏に話を聞いた。Riera 氏は英語が極めて堪能だったおかげで、3時間にわたり様々な話を詳しく聞くことができた。この店は、Riera 氏の母親がフトンを縫う技術をアメリカ人から習い、バルセロナ初のフトン店として開業した。それを家業として引き継いだので、日本への訪問経験もあこがれも無い。しかし商品についての理解は適切で、フトンと畳ベッドの利点を以下のように顧客に説明している。

- ・ 高さが低いので天井の低い部屋でも広く感じる
- ・ 寝る人数が変わってもフトンを買換えれば済む
- ・ 余った畳スペースに携帯電話などの小物をおける

顧客も特に日本愛好家というわけではなく、畳ベッドの省スペース性や天然素材の魅力を求めている。フトンと畳の適度な硬さが身体に良いと整形外科医に勧められて

やってくる顧客もあるそうである。こうなると畳が藁床であることが実用的に必要な意味をもつことになる。なお Cinius の販売権をもたない Ebra Natural では、畳と家具をフランスのメーカーから仕入れている。



図 2-5 Cinius 社から販売されている畳ベッド

畳ベッド以上に問い合わせが多いのは障子の衝立や引き戸で、場所を取らないことが喜ばれているとのことである。Cinius の障子では、和紙のような繊維の多い紙（Rice Paper）、帆布のような綿の生地、そしてポリカーボネートの薄板から選ぶことができる。また Cinius では上部がベッドで下部はリビングスペースや収納になっているような家具も多数販売している。バルセロナをはじめとするヨーロッパ都市部の集合住宅における居住面積が縮小していることに対応した商品である（図 2-6）。



図 2-6 畳を生かした省スペース用の家具

南欧の地域は概して天井高が高く、バルセロナでガウディが設計した住宅の天井高も概ね 4m 前後であった。しかし昨今のヨーロッパ大都市の過密な住宅事情の例にもれず、現代のバルセロナの住宅の天井は 2.5m にまで低くなっている。それに合わせて既成の建具の高さも低くなっているため、古い建物を改修した物件で天井高と建具の高さが合っていないものを見かける（図 2-7）。

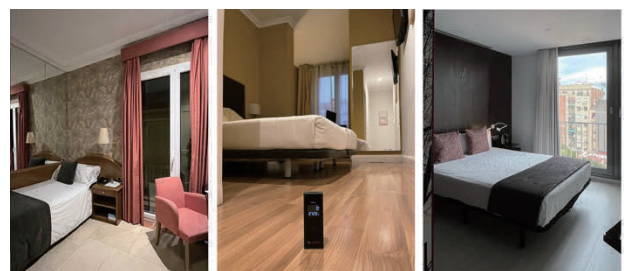


図 2-7 縮小する天井高 左から 3000, 2700, 2500mm

2.3 他地域における確認

バルセロナでの調査時に得られた情報をもとに、比較のため2023年にはCinius本社のあるイタリアのボローニャ、トリノ、ローマ、そしてフランスのパリのショールームを訪ね、店員への聞き取り調査を行なった。ボローニャ店では建築教育を受けたという英語の堪能な販売員がいたため充実した情報交換ができたが、トリノとローマとパリでは拙い現地語と翻訳機を駆使しながらの時間のかかる聞き取りとなった。それでも、製造元も顧客も畳の表がイグサで中身が稲藁であることを重視していることは、全店に共通して確認できた。畳以外の家具類についても、無垢に近い集成材などの木材で作られていることをセールスポイントにしているとのことであった。

トリノの店舗責任者は、自分自身も畳ベッドとフトンを長年愛用しており、もうそれ以外は考えられないと言った。「自然の草(イグサ)の上で眠ることでリラックスできる」そうであった。「新建材の入った畳では売れない」という見解はどこでも共通していた。日本の畳販売店ではでは問題視されている藁床の重さについても、「確かに意外な重さに驚く顧客は多いが、だからといって買うのをやめることはない」とのことであった。フトン自体、日本の布団と比べるとかなり分厚くて重たいが、欧米ではそれが標準である。フトンの中身は綿100%にもできるが、綿と綿の間にラテックスをサンドイッチしたものが主流となっている。前述のバルセロナのEbra Naturalではフルオーダーで手縫いのフトンも制作している。

イタリアの各店では障子には和紙が一番人気であると聞いたが、パリ店では「予算や用途に応じて綿やポリカーボネートを選ぶ顧客も同じくらいいる」と聞いた。イタリアでは障子の棧は無塗装に比較的人気があるとのことであったが、パリでは「無塗装と着色仕上げのどちらが人気か一概には言えない」との回答であった。これらの話は全て店員の印象であり、主観や営業トークが混ざっているかもしれないが、顧客の要求や好みに合わせられるだけの選択肢があることはわかった(図2-8)。



図2-8 Cinius ボローニャ店

2.4 畳の産地と品質

ヨーロッパで流通している畳は、産地のトレーサビリティが低く、その入手ルートをつきとめるのに困難を極めている。競合他社に知られたくないのか、日本産の畳だというイメージを纏わせておきたいのかは不明である。しかし日本産でないことを引け目に思っていることは、店員の対応の様子から明らかであった。ある住宅に納入されている畳の裏を見せてもらったが、中国語とともに日本産畳にはあり得ない日本語の記述があった。裏返さなくても筆者の目には日本産の畳表でないことは明らかであったが、現地の人達は裏返しても表記が読めない。中国以外にも台湾産地説や東欧産地説を耳にしたため、念のためイタリアのCinius本社に問い合わせたところ、中国の工場に作らせているとの確認が取れた。

一方、フランスのFuton Elite社では、「当社では日本市場向けに大量生産している中国の製造元から買い付けしているためコスパが最高です」とむしろ中国産であることを逆手に取って宣伝している^{注9)}。

しかしヨーロッパで発売されている中国製の畳は、日本の市場に出回っているそれとは明らかに違った。日本では商品として通用しないほど低品質である。畳表の織目は遠目に見てもわかるほど曲がっている。畳の角が立っておらず丸くなっており、輪郭も直線になっていない。ホームページの商品紹介やショールームの展示にもその座布団のような畳の写真を出しているところを見ると、おそらく本来あるべき畳の姿を知らないのであろう。日本製の畳縫機も中国に輸出されているはずなのだが、使い方がおかしいのか、あるいは別の機械を使っているのか、今後も引き続き調査し解明していきたい。

2.5 和風インテリアの設計と施工

日本人インテリアデザイナーが経営するJaponismeのショールームも見学した。床間をもつ四畳半の和室で、日本らしい見た目だが、近づいてよく見ると節のある集成材や、工場生産した樹脂製の欄間、そして和紙の畳を使用している。現地の顧客の需要に合わせた価格設定では日本製品や真正な材料は使えないため、中国にある複数の和風商品製造業者の中から信頼できるところを選び、コスト削減に努めているとのことである(図2-9)。



図2-9 Japonisme 社のショールーム

高級不動産物件を専門に扱う HJapon 社は、「サムライ」をコンセプトに事業を展開している。これら二社は、フトン販売店に見られたような機能性重視の方向性とは異なる、いわばイメージ戦略であった。HJapon 社では日本製のシャワートイレの輸入販売も行っている（図 2-10）。



図 2-10 HJapon 社のショールーム

2.6 「緑の建築」に偶然登場した日本

バルセロナの調査中、外壁をすべて天然の焼杉で仕上げた Entegra という 9 階建の賃貸オフィスビルを見つけた（図 2-11）。なぜこの外装を選んだのかを聞くべく設計者を探したところ、滞在中に撒いてきた種が実って開発担当者と設計担当者と連絡がつき、帰国後に三者ビデオ会議を開催し 1 時間にわたり話を聞くことができた。

開発者も設計者も特に日本について知識や思い入れは無かったが、環境に優しい建築材料を探していたところ、たまたま日本の焼杉と出会い、この物件で初めて採用した。設計を担当した batlleiroig 社は、もともとランドスケープ設計事務所として始まり、現在では環境配慮建築（green architecture）の設計事務所として拡大している。この物件は当初は構造も木造にするつもりで検討したものの、コストの理由から RC 造に変更し、内外装のみ木材を使用したとのことであった。欧米では「シヨースギ」という誤読が出回っていることからわかるように日本国外で製造されたものが多く、Entegra の外装材もスイスの工場で焼いたものとのことであった。



図 2-11 焼杉仕上げのオフィスビル Entegra

2.7 環境意識の違い

Entegra 以外のオフィスビルも集合住宅も、ルーバー等を活かしたパッシブデザインや緑を取り入れた建築が多く、環境配慮が常識化していると思われた（図 2-12）。たとえば筆者が聞き取りをした滋賀県日野町在住の欧米人たちも、現代の日本では使い捨てが常態化しているこ

と、食品パックやレジ袋などのプラスチック製品が氾濫していることに驚き、意識改革を促す活動を率先して続けている⁹⁾。スペインのオフィスビルに採用された焼杉も、もともとは日本の伝統的外装材であるが、現代の日本で新築物件に使用されることはほとんどない。



図 2-12 バルセロナの集合住宅

2.8 モデルニスモ建築と日本建築の接点

バルセロナはスペインの中では珍しく、日本と同じ高温多湿な気候である。そのためガウディの初期の建築などには自然の通風に配慮した設計が多く見られる。またモデルニスモの建築家達の設計による精巧な木工技術を活かした工芸的な建築物が多いところも、近代以前の日本建築に通じるものがある。特にガウディの建築には、部屋と部屋を繋ぎ通風も確保する引き戸や無双窓のような建具が随所に見られる（図 2-13）。こういった通風に配慮したパッシブデザイン的な建築に慣れていることも、バルセロナの人々が伝統的な日本建築的なものを無理なく受け入れる一因になっているのではないだろうか。

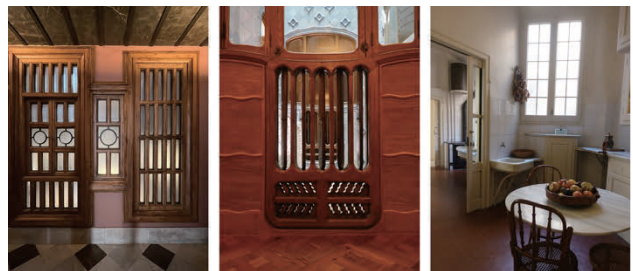


図 2-13 ガウディ建築 左：格子 中：無双窓 右：引き戸

2.9 畳の触り比べ体験

バルセロナでの対面聞き取り調査においては、この不動産経営者夫妻と前述のフトン販売店経営者夫妻の 4 名に、輸入取引程度の日本訪問経験をもつ不動産会社経営者 2 名の計 4 名に、並品から上等产品を含む数種類の熊本産の天然イグサ表、和紙表、化学表のサンプルを、素性を明かさずに触ってもらった。その結果、全員が天然のイグサ表とそうでないものの違いを容易に判別した。日本産の畳を見たことがないはずの Riera 氏も、一番上等の畳表を迷わず選んだ。その後、和紙表や化学表の畳のメリットについて説明してみたが、全員が「それでも天然素材の畳を選ぶに決まっている」と明確に述べた。

3. 民家サミットにおける畳の比較実験

3.1 民家サミット

古民家ジャパン (Kominka Japan) という NPO 法人が、日本の古民家好きの外国人が集まる「民家サミット」というイベントを 2022 年から開催している。もともとは SNS での情報交換グループから発展したもので、その SNS グループには現在 3,000 人ほどの登録があり、うち 300 名ほどがサミットに参加している。筆者は初回サミットから参加し、2023 年 4 月愛知県民の森で開催された第二回では、畳に関する講演を行うとともに、畳職人と表具職人の協力を得て紹介ブースを運営した (図 3-1)。



図 3-1 民家サミット 左：和紙ワークショップ 右：畳実験

3.2 畳の比較実験

畳紹介ブースには、4 つの異なる畳座面を乗せたツールを用意して参加者に座り比べてもらい、どれが一番座りやすいか、またどれがどの価格帯かを当ててもらった実験を行なった (図 3-2)。畳座面の正体は以下の通りである。一畳あたりの価格で 100,000 万円, 50,000 万円, 25,000 円, 15,000 円と大きく差がつくよう製作した。

- A 中国産普及 (JAS2) 藁草, 機械縫, 建材床 II 型
- B 日本産高級藁草, 手縫い, 藁床
- C 日本産中級藁草, 機械縫, 建材床 II 型緩衝材入
- D 日本産中級藁草, 機械縫, 藁床



図 3-2 価格の異なる四つの座面

QRコード読み取り式のアンケートで 41 名から回答を得た (図 3-3)。B の高級藁草と藁床の手縫い座面が 1 位になり、高級品はわかるようである。しかし C のクッション入り建材床と D の藁床の評価は予想と逆であった。

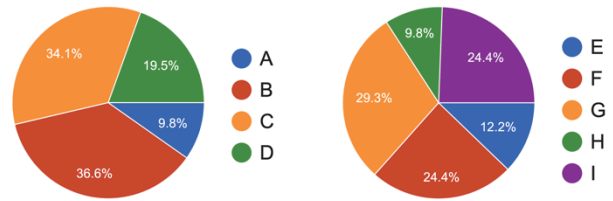


図 3-3 左：畳ツールの選択 右：ゴザの選択

価格帯においては、A が一番安価であり B が一番高価であることを正答した人が最も多かった (図 3-4)。

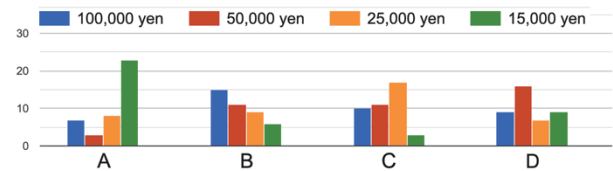


図 3-4 畳の価格当てクイズへの回答

さらに 30cm 角程度の畳表のサンプル 5 種類も用意し、手にとって触った上でどれが一番好ましかを尋ねた。なお、和紙表と化学表にも藁草の匂いが移っていた。

- E ダイケン和紙 (コーティングつき)
- F 熊本産藁草高級品 麻綿糸
- G 中国産藁草普及品 (JAS2) 綿糸
- H セキスイ MIGUSA® (ポリプロピレン合成材)
- I 熊本産藁草中級品 麻綿糸

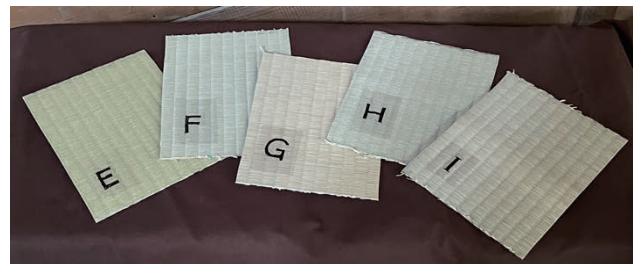


図 3-5 材料の異なる 5 種の畳表

ここでは最も安価な G の中国産普及品が 1 位で、選んだ理由は「柔らかいから」であった。しかし畳表は張ってしまえばゴザの柔軟性はあまり関係せず、目の詰まった硬い表のほうが長持ちする。固定した形で触ってもらうべきであった。2 位は同票数で熊本産の高級品と中級品となり、上位 3 つを天然の藁草が占めた (図 3-5)。

現場でのシール投票では、図 3-6 の結果となった。



図 3-6 左：畳ツールの選択 右：ゴザの選択

4. アンケート調査

4.1 母集団の属性

海外での聞き取り調査によって、畳や障子が求められている理由や、取扱業者が何を考えているかはかなり見えてきた。しかし調査地域がパルセロナに偏っており、もう少し客観的な証左が必要だと思われたので、特に畳に関して、選択基準や好みを問う大規模なアンケート調査を実施した。2023年4月から9月まで回答を受け付けたが、大半は最初の3ヶ月以内に集まっていた。

質問フォームをオンライン上に作成し、数種類の日本在住外国人のSNSグループに投稿し、主査が所属する欧州日本学研究会のメーリングリストにも流し、またかつて指導した留学生や海外の大学関係者にも知人友人へは個別の挨拶を添えたメールを書き、回答および知人への転送を依頼した。その結果、合計で790件の回答を得た。

回答者の属性は、「文化的背景」ということで国籍または出身地を自由記述で書いてもらったところ、日本人269人、外国人463人、未回答58件という内訳であった。性別では男性387人、女性370人とほぼ半々、年代もほぼ均等に集まった(図4-1)。なお建築関係者は全体の約35%で、その約6割は日本人であった。

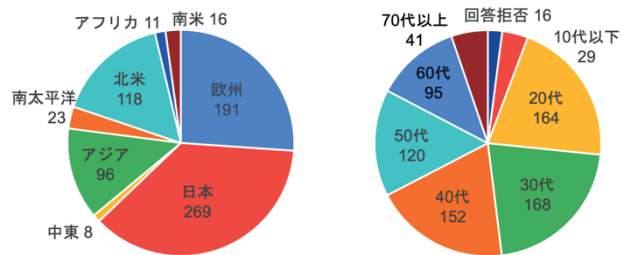


図4-1 左：国籍・出身地 右：年齢構成

回答者は全員来日経験があり、大半が1年以上の長期滞在者で、日本育ちの外国人も含まれる(図4-2)。古民家好きのSNSの人々にアンケートを配布したこともあってか、畳の所有率も非常に高い。外国人だけを取り出して見ても6割近くが畳を所有しているか、所有した経験をもっていた。このように、本アンケートの回答者集団は、一般的な外国人ではなく、日本の住環境に知識と経験のある外国人であると考えて差し支えないであろう。

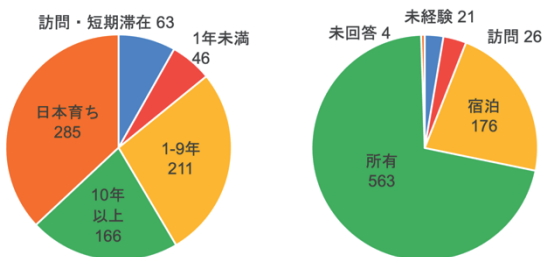


図4-2 左：日本滞在経験 右：畳の経験

古民家好きの外国人が必ずしも和室での生活を好むとは限らず、洋式のインテリアに改変している人も多い。明治期に来日した外国人の著述を振り返ってみても、日本家屋やそこで床坐生活を営む着物姿の日本人を美しいとは言うものの、自らが膝を曲げて床に座ることは拒否していた⁵⁾。しかしその後150年で欧米の生活様式は変わり、洋服も当時よりは楽なものが増えている。今回の海外調査においても、畳ベッドをはじめとする床に近い生活様式がヨーロッパで受け入れられ始めていることが明らかになった。そこで、図4-3の参考写真を提示した上で、床坐は好きか、床就寝は好きかと訊いてみた。



図4-3 左：床坐 右：床就寝

より正確に意向を汲むため、YES(はい)とNO(いいえ)に加えて、「座れないことはないが家具があるほうが良い(家具希望)」と、「寝れないことはないがベッドがあるほうが良い(ベッド希望)」という選択肢も用意した。結果、明治時代頃の外国人とはかなり様子が違い、6割前後の人が床坐や床就寝を「好き」と答えた(図4-4)。

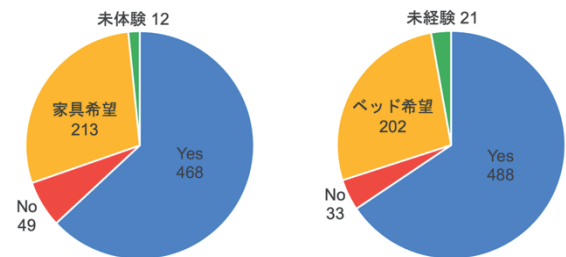


図4-4 左：床坐は好きか 右：床就寝は好きか

日本でも今は家具やベッドを使う生活が主流のため外国の住宅との差は小さいはずだが、念のため確認すると、外国人も床坐や床就寝には好意的であった(図4-5)。

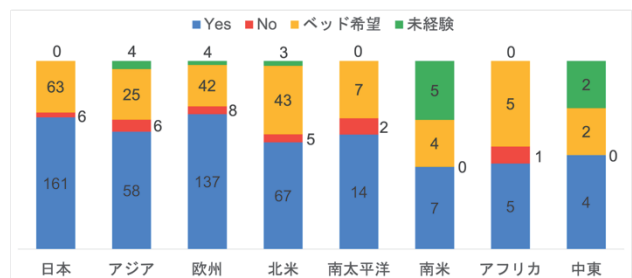


図4-5 床就寝は好きか 出身地別

4.2 畳についての好みの出身地別比較

日本国内ではポリスチレンフォームを用いたいわゆる化学床がもはや主流であるが、ヨーロッパでは畳といえば天然藁草表と藁床と決まっている。「自然の藁草(30kg)」と「スタイロフォーム(10kg)」から選択させたところ、日本人以外では圧倒的に藁床が支持された。欧州と北米では石油製品をなるべく使わないという習慣が定着しているため、化学床を選ぶ人は少ない(図4-6)。

ここでは「価格次第」が予想外に多い回答となつてしまい、具体的な価格を示した上でいずれかを選択してもらおうべきであったと反省した。実は化学床と藁床に大きな価格差は無く、藁床の品質にもよるが、せいぜい化学床の1.5倍前後である。化学床の寿命が10~20年であるところ、藁床は手入れ次第で100年もつため、初期費用の差は容易に回収でき、持続性の高い建材であると言える。現在は産業廃棄物扱いとされているが、本来は藁床は寿命を終えたら土に返すことができ、農家の肥料として使えるものであった。日本市場において藁床がほとんど見られなくなったのは、生産量と流通量が少なく仕入れが安定しないこと、重量を理由に畳販売店に避けられる傾向がある、といったことが要因と考えられる。

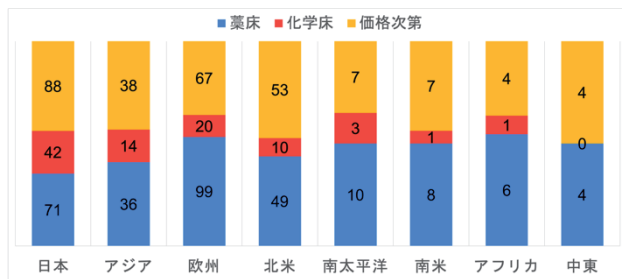


図4-6 畳床の選択 出身地別

畳表の材料については、下記のような選択肢を示した。

- ・ 高品質な藁草 (草の香り、手入れをすれば長持ち)
- ・ コーティングした和紙 (褪色しない、維持管理容易)
- ・ 化学合成 (褪色しない、維持管理容易)
- ・ 低品質の藁草 (草の香り、安価)

ここでも、欧米人が「手入れ次第で持続性の高い」高品質の天然藁草を求めていることがわかった。一方、低品質で安価な藁草の人気が高いのは日本である(図4-7)。

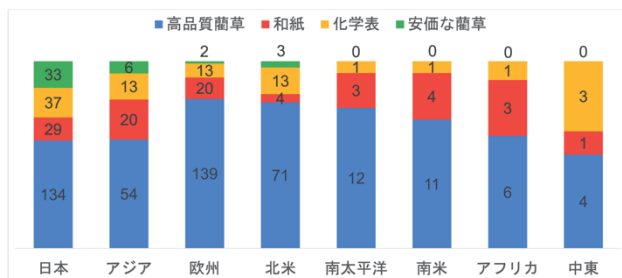


図4-7 畳表の材質選択 出身地別

海外で小さな端切れのサンプルやミニ畳を見せた時にはデザイン織に人気があったので、畳表デザインについても好みを聞いてみた(図4-8)。その結果、部屋全体に使うとなると保守的になるのか、自然の藁草の色で一般的な織り方の畳表が圧倒的な支持を集めた(図4-9)。

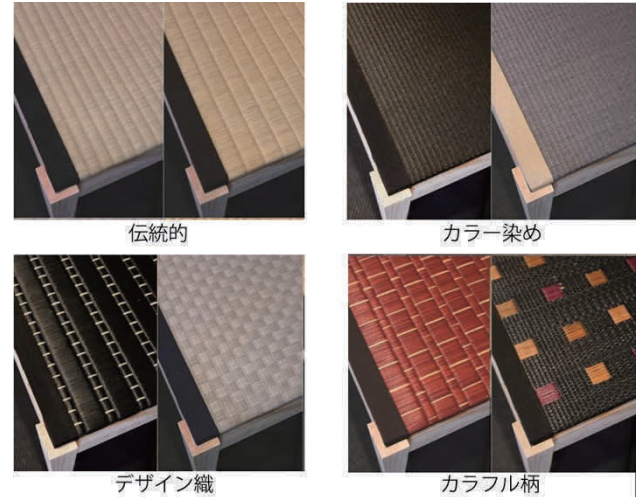


図4-8 畳表のデザイン選択肢

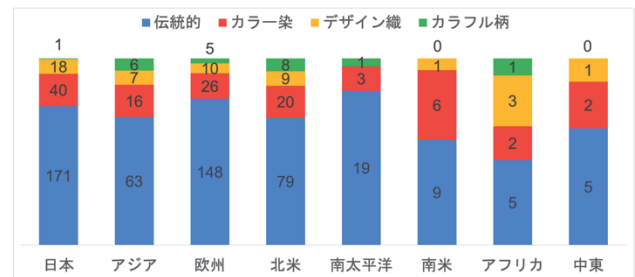


図4-9 畳表のデザイン選択肢

部屋で使われている写真(図4-10)を示した上で、縁の好みについても聞いてみた。しかしここでは色無地縁だけがカラー染めの表であったことが選択に影響した可能性は否めず、質問紙作成の不備として反省している。

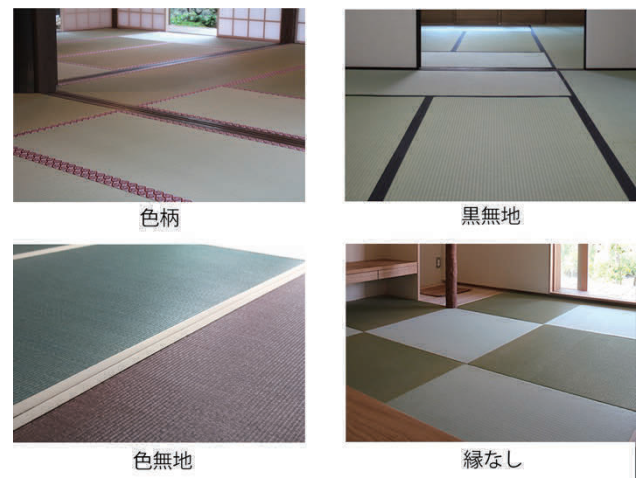


図4-10 畳の縁のデザイン選択肢

縁に関しては黒無地が最も支持を集めた。海外調査で聞いた「日本のサムライ映画やアニメに出てくるような、藺草色の畳表に黒無地の綿の縁をつけたオーソドックスな畳が一番人気を呼ぶ」という意見が証明された。

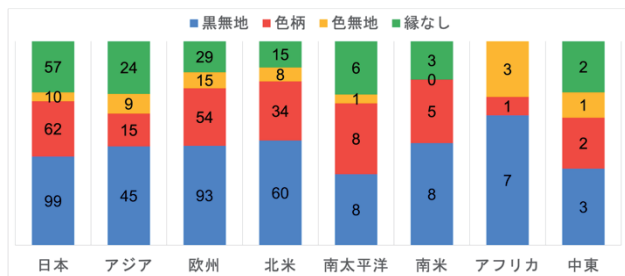
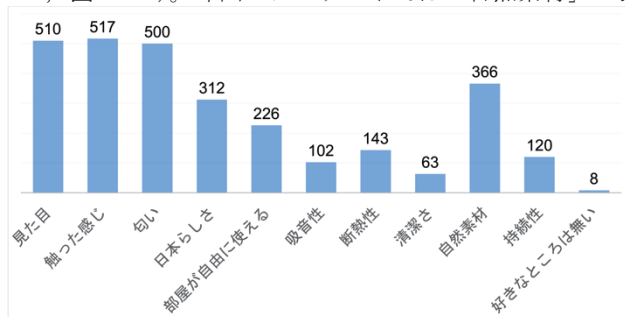


図 4-11 畳縁のデザイン選択 出身地別

4.3 畳が好きな理由、嫌いな理由

複数回答で畳が好きな理由を尋ねたところ、2020年に実施した予備調査における回答とほぼ傾向を示した（図 1-2、図 4-12）。今回のアンケートでは「自然素材」「匂



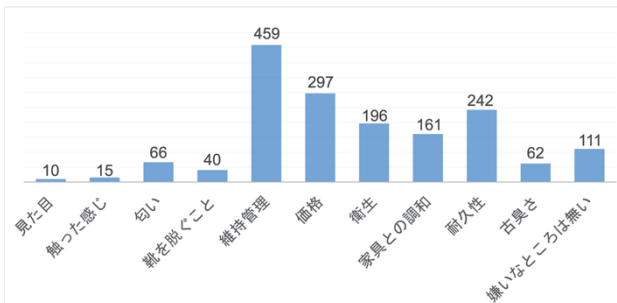
い」といった回答がさらに伸びていた。海外調査の中でも「畳は天然素材であればこそ売れる」という意見を多く聞いたが、それがこのアンケート調査によって裏付けられることとなった。畳表の選択（図 4-7）においても和紙がほとんど選ばれなかったのは「コーティング」の一言があったためであろう。予備調査において畳の維持管理に不安をもっている人が多いことがわかったので、海外調査においては、フッ素加工により撥水防汚機能をもたせた天然藺草の畳表を紹介した^{注6)}。天然の藺草の香りや風合いのままでも撥水効果があることをデモンストラレーションして見せたにも拘らず、「化学薬品がついているのか」と難色を示すヨーロッパ人は少なくなかった。なお人気の高い「匂い」に関しては、香料メーカーの協力のもとに和紙や化成品の畳表に藺草の香りを刷り込む試みもあったそうだが、いまだ成功していない^{注7)}。

図 4-12 畳が好きな理由 (2023年)

畳を嫌いな理由として、維持管理に不安を感じる人は、前回も今回も圧倒的に多かった（図 1-3、図 4-13）。価格については、何をもって「高い」と感じるのかは不明だが、欧州市場で売られている中国製の畳は一枚 100～200 ユーロ程度である。耐久性については、前述したように

日本国外では表替えができないという問題がある。しかし日本人を除き、畳の販売員も含めた全員が、そもそも畳表が替えられることを知らなかった。

図 4-13 畳が嫌いな理由



4.3 畳についての見解 出身地別比較

出身地別では、「持続性」に興味がなく、「部屋が自由に使える」ことに気づいていないのは日本人であった。欧米人は持続性に高い関心を示し、特にヨーロッパ人は、部屋が自由に使えることや、吸音性や断熱性といった機能面に着目している。一方、総じて外国人は「日本らしさ」に興味が無い（図 4-14）。視察したフトン販売店でも、ショールームの雰囲気づくりのために着物や掛け軸や仏像の置物などをディスプレイはしているものの、店員はそれらに興味は無いと断言していた。「日本に行きたい」という希望も、社交辞令ですら聞かなかった。

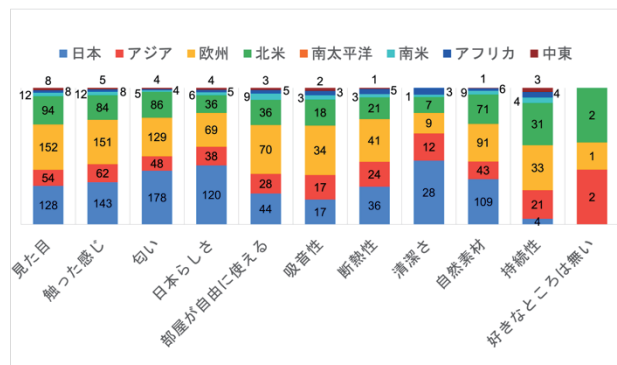


図 4-14 畳が好きな理由 出身地別

畳を「古臭い」と思っているのは主に日本人とアジア人である。中には靴を脱ぎたくない人もいる（図 4-15）。

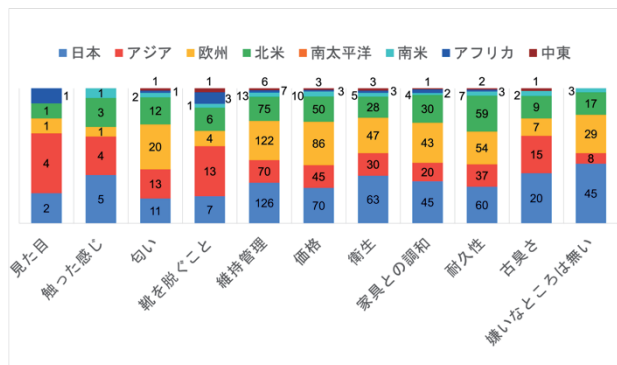


図 4-15 畳が嫌いな理由 出身地別

4.5 和室についての見解

「和室」の定義ははまだ専門家の間でも確立していない¹⁰⁾。そこでAからDの4枚の写真を提示して「どれが一番和室だと思うか」と一般人の考え方を尋ねた。言葉で説明はしなかったが、それぞれの写真の中で表現しようとした要素は、A. 畳、B. 真壁と小路、C. ベッドがある、D. 床坐と掃き出し窓である（図 4-16）。



図 4-16 どれが一番和室だと思いますか？

すると全体ではB（真壁と障子）を選んだ人が一番多く、次点のA（畳）を引き離した。「もしBに畳があれば」という意見は「その他」にもかなりの数が入っており、それでもBが一位であるところを見ると、和室イコール畳という考え方は必ずしも成り立たないことがわかった（図 4-17 左）。しかし欧州出身者には畳のあるAが比較的多く選ばれている（図 4-18）。選択理由を見ると、Aは「畳があるから」が目立って多かったが、自由記述コメントに「Aにカーテンさえ無ければ」という記述も頻出したことから、カーテンが和室のイメージを大きく壊すことがわかった。またCが真壁と竿縁天井と障子が揃っているにも拘らず和室だと思われなかったところを見ると、ベッドの存在も和室らしさを著しく妨げるようだ。Dの床坐と掃き出し窓は、生活様式や空間に関わる要素なので、障子や畳といった具体的なアイテムよりもわかりにくいようであった。

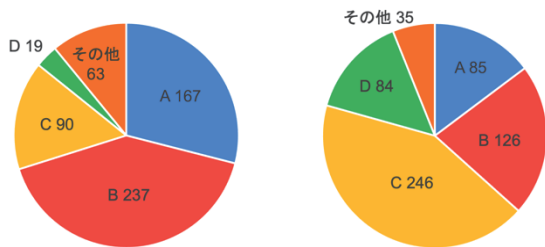


図 4-17 左：どれが一番和室か 右：どれに住みたいか

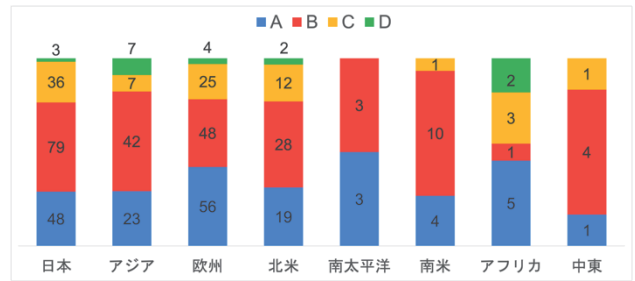


図 4-18 どれを和室だと思うか 出身地別

次に「どの部屋に一番住みたいですか？」と尋ねてみると、Cが圧倒的1位となり、Bがそれに続いた（図 4-17 右）。いわゆる「モダン」なイメージの大壁のAとDに人気が無かったのは、昨今の日本の住宅市場と相反する。そこで出身地を確認してみると、日本人には相対的にDの評判が良いことがわかった（図 4-19）。

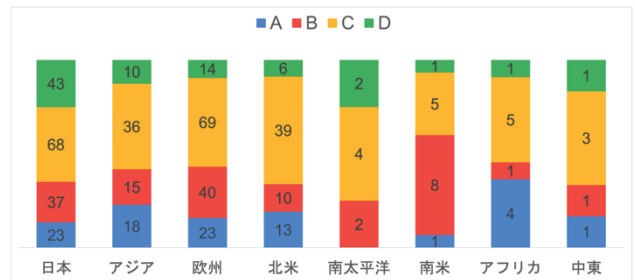


図 4-19 どの部屋に住みたいか 出身地別

これらの回答に関して、出身地以外の性別や年齢といった属性による大きな差は見られなかったが、「日本育ち」を除外した外国人のみを取り出すと、日本滞在期間により若干の変化があるように思われた（図 4-20）。

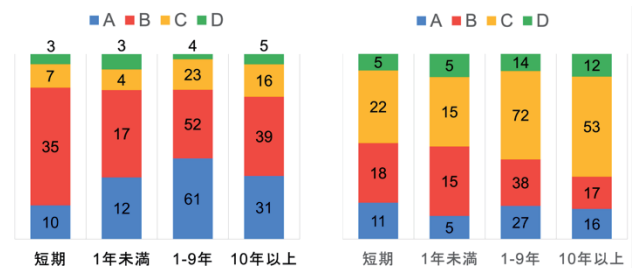


図 4-20 左：和室選択滞在期間別 右：和室選好滞在期間別

自由記述欄に関しては、和室だと思う理由として「自分が日本で住んでいた部屋と似ているから」とか、住みたいと思う理由に「エアコンがあるから」など無関係な要素を指摘されてしまい、明確な結果が得られなかった。また外国人の回答は「ベッドがあるから」「畳があるから」など具体的なものが多いが、日本人の回答は「好みだから」「慣れているから」など主観的であった。結果的には「畳」などの用語を理解している回答者集団だったので、写真よりも文言を選択させるべきだったと悔やまれた。

5. 結語

スペイン、イタリア、フランスにおける調査により、同じ中国産の畳でも、日本国内市場で流通しているものよりも低品質のものが売られていることがわかった。現地の顧客は「自然素材の上に寝る」ことを重視しており、日本で主流になっている建材床や建材メーカーの畳表は一般の住宅向けには受け入れられない。逆にヨーロッパでは質の良いもの大事に長く使う習慣が定着していることから、手入れ次第で100年もつ稲藁床や高品質な藁草の畳表は、欧州市場では歓迎されるのではないだろうか。それには現地に表替えのできる職人が必要となる。

今回の調査地がバルセロナ、イタリア各地、パリと南欧に偏ったのは、予備調査を通じて訪問調査を受け入れてくれた対象者、そしてそこからの紹介を得たことだったためである。しかし結果としては、日本と同じ温暖湿潤な気候における畳の受容、過密化する都市における和室の生活様式への受容と展開を観察することができた。しかしイタリアやスペインのような南欧は、日本のインテリアと親和性の高い北欧と異なり、床は石かタイルの場合が多く、室内で靴を脱ぐという習慣が無い。そのような住宅において畳を使うには畳ベッドのような家具を使うことが主流であり、部屋一面に畳を敷いている住宅は一軒でしか見なかった。部屋を採寸し畳の寸法を調整する畳職人がいないがために、畳を敷き詰めることができないのである。表替えができる職人もいない。これは職人のビジネスチャンスに繋がる可能性がある。

一方で畳ベッドのような部分的使用は、日本の現代住宅における畳の生き残り戦略を見るかのようなものである。畳の衛生や維持管理の観点からも、欧米で売られているスノコ状の畳ベッドは適切である(図2-6)。販売店では、畳の下には必ず通気を確保するように顧客に指導していた。そもそもフトンの通気性を確保するために畳ベッドを推奨しているのであって、稲藁の畳床であることは、健康のための適度な硬さのみならず、通気のためにも必要なのだという。藁床と藁草の生産を諦めてしまうのは、まだ少し早いかもしれない。

外国人は日本のかつての居住環境の機能性と持続性に着目し、合理的かつ実用的にそれを取り入れている。この仮説は、今回の海外調査とアンケート調査により、ある程度裏付けられたと言えるであろう。しかし現地調査はまだ南欧の数カ所しか行っていない。日本と同じくもともと靴を脱ぐ習慣があり、日本のそれと似た針葉樹材の内装に馴染みのあり、欧米風の「フトン」の発祥の地でもある北欧諸国の畳市場はどうなっているのか。また日系人が多く暮らしているにも拘らず、靴を決して脱がず床にも座らない生活様式の南米ではどうなのか。そして、中国の畳産地は今どうなっているのか。世界の諸地域について、今後も調査を続けていきたい。

<謝辞>

本研究は一般財団法人住総研の研究助成のおかげで遂行することができました。この場を借りて深く御礼を申し上げます。また住総研を筆頭に、本研究に関連する著作類の出版の機会をくださった関係各位にもお礼を申し上げます。また貴重なお時間を割いて聞き取り調査に応じてくださった皆様、情報提供をくださった研究協力者の皆様にも深く感謝を申し上げます。

<注>

- 1) 東海機器工業株式会社主催イグサ勉強会(2023.6.29 熊本県八代市)および日本建築学会和室の世界遺産的価値特別調査委員会の畳店視察(2019.3.11 台湾高雄市)にて見聞
- 2) 知人のネットワークとインターネット情報から海外の和室関連の情報を探し、在外邦人の協力が得られたスペインのバルセロナから調査を開始
- 3) 森田畳店 畳メイキングキット
<https://www.tatami-mat.net/ex-tmkj.html>
- 4) ベイツガのように見えたが確証は無い
- 5) Futon Elite <https://www.futons.fr/23-tatamis>
- 6) ウォータージュエリー加工畳表
<https://www.tokai-kiki.co.jp/wj-tatami>
- 7) 日本建築学会和室の世界遺産的価値特別調査委員会において株式会社カンベ(本社京都市)から見聞

<参考文献>

- 1) 鈴木あるの:和室の現状と日本人の認識,日本建築学会大会(東北)PD資料集寄稿,「和室」の日本建築における価値を改めて問い直す, pp.65~69, 2018.9
- 2) 佐藤圭一,「備後表継承会」と地域遺産,日本建築学会大会(東北)PD資料集寄稿,農山漁村を動かす人々、『〇〇ターンの』と地域組織・地域再生のこれから, pp.69~70, 2018.9
- 3) 鈴木あるの, 外国人の畳に対する意識:アンケート調査報告,民俗建築第158号, pp.11~14, 2020.11
- 4) 鈴木あるの・河合淳子・田中みさ子・鈴木克彦, 留学生の住宅嗜好とその背景に関する研究-中国人留学生の動向に注目して-, 日本建築学会計画系論文集第78巻 686号 pp.745~754, 2013.4
- 5) 鈴木あるの, 外国人から見た「和」の住まい,住総研住まい読本「あこがれの住まいとカタチ」第6章, pp.134-158, 建築資料研究社, 2022.12
- 6) 真家和生, 日本人と折りたたみの文化, エプタ vol.64, 2013.11
- 7) 鈴木あるの, 西洋人による日本文化の評価(その1)-住まいとその周辺にまつわる記述の收拾-, 京都橋大学研究紀要第49号, pp.239~249, 2023.2
- 8) 鈴木あるの, 外国人の畳に対する意識:バルセロナにおける聞き取り調査報告, 民俗建築第165号, 2024.5 掲載予定
- 9) 鈴木あるの, 外国人による暮らしの伝統の継承:滋賀県日野町において, 農業と経済2023年春号, pp.217~221, 英明出版企画, 2023.5
- ・ 松村秀一・服部岑生編著, 和室学, 平凡社, 東京, 2020.10
- ・ 松村秀一・他編, 和室礼讃, 晶文社, 東京, 2022.12

<研究協力者>

薄井正統	内装施工, Kantoku, バルセロナ
久岡俊平	内装設計, Japonisme, バルセロナ
大江俊幸	一級畳技能士, 大江畳店, 大阪
中野智佳子	一級表具技能士, 中野表具店, 大阪
岡田さおり	和装家, 通訳, 大阪
Austin Moore	日野まちなみ保全会事務局長, 滋賀県
Rebecca Otowa	作家・画家, 滋賀県
Sean Chumiecki	日野ブルーイング共同代表, 滋賀県
Guillermo Riera	Futon Llit 代表, バルセロナ
Ignasi Elias	Akaneya Group 代表, バルセロナ, パリ
Marcel Japon	HJapon 代表, バルセロナ
Yuko Yamashita	Yamashita Group 創業者, バルセロナ
Xavier Bolando	Bolando-ya 代表, パリ
Luna Fenil	Cinius 本社営業部, ボローニャ
Sabrina Pansardi	Cinius Paris 店舗責任者, パリ
Chiara Lenardon	Cinius Torino 店舗責任者, トリノ

(順不同・敬称略)